優秀賞

共に生きる

伊集院北中学校　2年　四元　七星

僕には、体の不自由な従妹がいます。僕よりもずっと年下なのですが、移動するときはいつもバギーを使っていて、不便な思いをすることも多そうです。しかし、この子のおかげで僕は福祉について考えてみようと思いました。

調べてみると、日本には 936.6 万人の障がい者がいることが分かりました。そしてその多くの人が高齢者でした。このような高齢者は生まれつきの人もいるかとは思いますが、長年生きてきたことによる障がいが多いと思います。このような方々には、デイサービスなどの取り組みや、車いすなどの便利な道具があります。しかし、障がい児に対しての取り組みは障がい児を受け入れる施設が少ない、教育環境が悪いなど高齢障がい者と比べて不十分です。さらに、障がいがあり他の人とは違うという理由からいじめや、差別を受けている場合もあります。

僕はこのような問題に対して、３つの取り組みを考えました。１つ目は、障がい児を受け入れる施設や学校の数を増やすことです。障がい児の入学する支援学校という学校はあります。しかし全国の学校の数約 45,100 校に対して、支援学校の数は 960 校ととても数が少ないです。これによって、適切な教育がされなかったり、勉強ができなかったりという人が増えてしまいます。さらに高校を卒業した後の行き先の１つである社会福祉施設の数も少ないということもありえます。受け入れる施設が増え、障がい児の生活する環境がもっと整えられたらいいと思います。２つ目は、障がい者に対しての知識をもっと深めるために、障がいについて学習する機会を増やすことです。今も障がいを理由にいじめや、差別をされている人がいます。だから実際に障がいのある講師の方に来ていただいて、その大変さや、障がいについて知るのです。もっとよく理解することで、分かりあえると思います。また、車いすに乗るなどを自分の体で体験することでさらに深く理解できると思います。３つ目は日常の環境を整えることです。

従妹を見て思ったのですが、バギーでは階段を上り下りすることができません。もちろんスロープのある階段もあるのですが、まだまだ少ないです。他にも、凹凸が激しくバギーがガタガタ揺れる歩道もあり、乗る側、押す側ともに、負担がかかっていそうだと思いました。他にも小さな段差など、車いすやバギーで通りづらそうなところも多いです。体の不自由な人の視点に立って舗装したり、スロープを増やしたりしてもらいたいです。

また、言葉を話すことのできない障がいのある方々とコミュニケーションをとる方法として、マカトン法という言語指導法があることを知りました。マカトン法とは、手指による動作表現で、自分の気持ちを伝えることのできる、ジェスチャーや簡単な手話のようなものです。これを取得することができれば、言葉の話せない障がい者とも、簡単なコミュニケーションならばとることができるようになります。障がい者の方々自身も、とても生活がしやすくなるのではないでしょうか。

最後に障がい者というけれど「障がい者」という言葉を差別として使うのではなく、それを１人１人の個性と捉え、障がいのあるなしに関わらず、困ったことがあったら助け合い、皆と同じように接したいです。私たちは誰しも１人では生きていけず、誰かの助けを必要としています。それぞれがどのような支援を必要としているのかを知って、理解するきっかけとなることで、配慮を必要とする方も支援する側も安心して暮らすことのできる共に生きる社会に繋げていきたいです。